

大沼法竜著

信仰に悔める人々へ

敬行寺發行

信仰に悩める人々へ
(上巻)

はし が き

頭あたまは承知しょうちしても、胸むねの承知しょうちできない方が多いおお。理屈りくつは、なるほどと合点がってんができて、
も、実地じつちの体験たいけんのある人ひとが尠すくない。墮おちる者ものをお助けたすけと言いってはいるけれども、墮おちた
覚おぼえがないものだから助たすかった自覚じかくがない。他力たうりきと口くちでは言いっているけれども、他力たうりき
になつた人ひとがない。第十八願だいじゅうはちがんを聞きけ聞きけと言いっているけれども、真仮しんげの水際みずぎわを知らな
い。

素直すなおになれる人ひとは善人ぜんにんだから、幸福こうふくであるけれども深みふかがない。煩悶はんもんの多い人ひとは悪
人にんであるから、求めぬかねばならない。求めぬきさえすれば、平生へいぜい業成ごうじょうの教えおしだから
現在げんざいに開發かいはつしないことはない。

多くおほの方々かたがたは「疑うたがうてはならないぞ」「そのままの教えおしだから機きを見る必要ひつようはない
ぞ」「唯ただじゃ」「易やすい」と有頂天うちようてんになって喜よろこんでおられるけれども、ある一類いちるいの人ひとた

ちは「いくら聞いても喜びきららない」「疑いの心の晴れられない」「機を見るなどいわれても見ずにはおられない」「どこに只があるか」「ただの只なら誰でもいうけれども、薄紙一重が晴れられない」「難中の難とはこのことであるか」と泣いておられる方もあるに違いない。

私は自身が求める時に苦しかったから、煩悶しておられる方の味方となつて共に泣いてあげたい。信仰は真剣でなければ求め得られない、理屈がわかり、有難うなものが信仰の全部ではない。そのままごかしに、こかせたのが他力ではない。唯の中には、五兆の願行の生き血が流れている。そのままの中には、全宇宙の念力が注がれている。自分の自性に驚かされない方は「はい」と返事もできようけれども、調熱の光明に照らし出されて不実を知り、真剣に求めて無能を知り、臨終が迫って逆謗の屍であることに驚いた者が、じつとして死んだ先の往生を夢見てはおられない。

溺れていない人には、救われた味がわからない。飢えていない人には、一膳の御飯

の尊とうとさがわからない。苦く悩のうのない人ひとには、真しんの満まん足ぞくはあり得えない。疑ぎ雲うんのない人ひとには、大だい信しん心じんは得えられない。臨りん終じゆうを引ひき寄よせて聞きいた人ひとでなければ、開かい発ほつはわからな
い。

お互たがいに真しん劍げんで進すすみましよう、疑うたがわないようにするのでなく、疑うたがう余よ地ちのなくなる
まで進すすみましよう。機きを見みないようにして往おう生じゆうするのでなく、機きを見みてもよし、法ほうを
見みてもよしと自由じゆうのきく身みにさしていただきましよう。南な無む阿あ彌み陀だ仏ぶつ